

【モータースポーツコラム】

筆者：石川 真禧照

いつもモータースポーツパートナーズにご協力いただき、ありがとうございます。モータースポーツの振興を通して、多くの人たちと活動の輪を広げていきたいという願いは、残念ながら去年は“コロナ禍”という前代未聞の予期しなかったことにより、歩みを止めざるを得ませんでした。回復の見通しも立っていません。

しかし、こうした状況のなかで、黙って見過ごして、また1年を過ごすことはどうなのでしょう？ 復活に向けてのアクションをおこしてみる。そんなことを考えています。

2020年のモータースポーツは惨々でした。サーキットレースは中止になったり、無観客で行われました。ラリーも同じでした。参戦する人たちも、観戦する人たちも“密”を避け、厳しい自己管理の下に行動しました。

2021年はこの動きをもう一歩進めてみたいと考えてました。それはボクの中では漠然としたものでした。



ある日、長年の知人がこう言いました。彼は若い頃にサーキットレース（もちろんアマチュア）に出場するなど、モータースポーツを楽しんでいました。

「70歳をキッカケにもう一度サーキットレースを走ってみたい」

この提案にボクは大賛成しました。日本ではレースやラリーというと若者たちの趣味の世界のように思う人がほとんどでしょう。しかし、アメリカやヨーロッパでは決して若者のスポーツではないのです。サーキットに行けば白髪の老人がハツラツとして居ます。レースだって、参加者がみんなで楽しむといった雰囲気です。もちろんプロフェッショナルな人たちのレースはピリピリとした緊張感が漂い、真剣勝負です。

でも我々はアマチュア。レースで生活をしているわけでもないし、成績が次の年の契約に関係するわけではありません。プロとアマの世界の違いです。



昔、ボクがゴルフをはじめた頃、トーナメントプロにレッスンを受けていました。そのとき、悪天候でのゴルフの話しになりました。プロは賞金がかかっているから、雨でも風でもコースに行き、試合をする。でも石川さんはアマだから、楽しめばいいんです。雨の中でゴルフをして楽しいですか？ 良いスコアがでますか？ 石川さんは自動車評論家だから、試乗で新型車をテストすることがあります。そのときは雨でも悪天候でも、箱根や軽井沢のほうに行きますよね。でもフツウの人たちは、雨や悪天候のときにそんなところに行こうとは思いません。

このやりとりはいまでもボクの楽しみ方の基本になっています。アマは楽しむことが大切なんだ。日本のアマチュアのレースを見ると、すぐみんな本気モードになり、勝つことにこだわる。そのために雰囲気ギスギスする。

いいじゃない、楽しめば。そろそろこういう感じでレースを楽しむ人たちが出てきて良い時代に、なってほしいと思っています。



一方ボク周りには、こういった思いを持つ人たちもあり、そんな仲間が集まり、レースが出来そうです。シリーズ戦に参加し、春は北海道で、美味しいものを食べながらレースに、そして、東北、関東、中部、関西、九州、各地を旅しながら参戦していけたら素晴らしいではありませんか！

もちろん、いまの時点ではそんなことができるのか分かりません。でも、着々と準備を進めています。自由に旅ができるようになったら、まっ先にエントリーして、ツアーに出かけようと考えています。

モータースポーツの底辺で、こういう“オールドボーイ”たちが楽しんでいる、ということを少しでも知ってもらいたい。

そんな活動を、2021年からスタートさせたいのです。

暗黒だった2020年の年末を迎え、次の年への希望の光を燃やすためにこんなことを考えながら、新しい年を過ごしていこうと思っています。





（プロフィール）

石川 真禧照(いしかわ まきてる)／東京都出身 1947年生まれ
学生時代から国内ラリーに参戦、卒業後は専門紙に入社、モータースポーツの取材を担当。独立後は週刊誌のフリー記者としてモータースポーツをはじめクルマに関する企画、編集、取材、撮影に従事。20代後半からTVの仕事で欧州、中東、東南アジアを14か月間走破。海外の車生活事情にも詳しくなる。国産、輸入車の知識も豊富。現在はAJAJ（日本自動車ジャーナリスト協会）副会長、JMS（日本モータースポーツ記者会）監事を拝命。日本モータースポーツ推進機構副理事長

